



白磁蟻竜博山炉

この夏の記録的な猛暑も漸く峠を越して、秋の気配がそこはかたく肌身に感じられるようになってきました。7月中旬からこの松林の草むらに純白で大輪の美しい花で彩ってくれた山百合も今は僅に咲き残っている程度ですが、代って今は芙蓉が花盛り、萩がそろそろ見頃となってきました。暑さの大好きなきりぎりすはまだ健在ですが、暑苦しい油蟬は殆んど鳴きやみ、ゆく夏を措しむように法師蟬が早朝から気ぜわしく鳴いているのはいかにも近づく秋の足音を聞く思いがします。陽が傾くと秋の鳴く虫の音が聞えてきます。鳴く虫の王様はかんたんだといわれていますが、この虫は高原の虫ですから、この辺にいないのは当然ですが、くつわむしやうまおいが全然いないのは、これも宅地造成のせいでしょうか。鈴虫は僅かに生存していますが、松虫、各種のこおろぎ、くさひばり、かねたたき、などは実に豊富で、それぞれ特有の美しい音色で自然界のシンフォニーを奏でてくれます。日本人ほど昔から鳴く虫の音をめでてきた民族は世界中どこにもないようです。私も人一倍小鳥の囀り

や秋の虫の音に魅せられているのですが、食物で失われた季節感が鳥や虫の世界には厳存していることを幸福に感じています。

今日は虫の音を聞きながらカットに戴せた邢州窯「白磁香炉」にまつわる忘れがたい思い出を書き留めておくことにしました。この香炉は「美のたより」No.9に写真を掲げ、1969年春の名品展の際、新取品として初めて公開し、その後も再三展示していますからご記憶の方々も多いかと想います。これを初めて見た人々、殊に専門家たちは例外なく「これは素晴らしい。こんな名品は見たことがない。一体今までどこにあったのですか。どういう人がもっていたのですか??」とたたみかけるように質問を連発して私たちを当惑させたものでした。当時は事情があったという質問には応答できませんでした。

この香炉の類品については「大和文華」第34号に藤岡一氏が詳しく論考され、またこの白磁香炉そのものについては「大和文華」第54号に谷田閣次氏が様式的にその製作年代を隋朝(589~618A.D.)と見る印象深い論究を発表されています。製作時代については多少の異見はあっても隋乃至初唐のいづれかと見られるものですが、一見して王者の風格を備えた堂々とした器形、あたたかみのある淡茶色の肌は微妙な濃淡の変化を示し、いかにも気品があります。とりわけ竜の造形の鋭く力強い美しさはこの種類のものとして比類がない

といて差支えないでしょう。

この名品を大事に秘蔵していた方が故白江信三(1886年3月4日生れ)さんでした。白江さんに私が初めてお会いしたのは1930年秋のことで、私がニューヨークのメトロポリタン美術館の極東美術部助手に任命されて赴任した時です。白江さんは当時既に山中商会のニューヨーク支店長の要職についておられました。誠に温厚篤実な紳



故白江信三氏

士で私はいつもその温情に浴したものです。特に私がニューヨークに着いてから最初の日曜日にわざわざ下宿にお訪ね下さってセントラル・パークの西側にある巨大なアメリカ自然史博物館に案内され、丁度そこで催されていた菊花大会の会場へ連れて行って下さったのですが、そこで見た大輪の菊花がとてつもなく大きくて、私のかぶっていた帽子のつばからはみ出るのに驚いたことを今もよく覚えています。この山中商会は東洋美術専門としては世界屈指の大会社で北京を始め欧米の大都市には立派

美術随想 (3)

—— 白磁香炉と白江信三さんの思い出 ——

大和文華館館長 石澤正男

な支店を持ち、太閤さんことモンキイ・ヤマナカの愛称で国際的に親まれていた山中定次郎翁統率の下に盛大な事業を営んでいました。不幸にも第2次世界大戦となり、ニューヨークの5番街の目抜き場所にあった山中商会所蔵の美術工芸品は敵国財産として没収の上競売に付せられてしまいました。当時責任者の地位にあった白江さんの苦悩は察するに余りあるものであったろうと同情の念を禁じえません。この白磁香炉は戦後入手されたものに違いありませんが誰れにもお見せにならなかったそうです。偶々前館長の矢代先生が1965年渡米された際、年来昵懇の先生にお見せになったのがきっかけとなり、先生の所望に応じて1968年に大和文華館に割愛されることになったのでした。その後白江さんは1970年8月に満37年ぶりで帰国されましたが懐しい吾が家で落ちつかれる暇もなく発病され遂に再起されず、御令息始め親しい身内の方々に看取られながら8月14日近くの病院で数奇に充ちた84才の生涯を終られたのでした。ご家族の方々の深いご傷心もさこそと思いやられますが、私としてはこの名品を文華館で見ただきながら積る懐旧談のできなかつたことがなんとも心残りです。仕方がありません。この香炉を見る度に異郷で孤独な生活に堪えてこられた白江さんをこの名品がどんなにか慰め、生きる勇気を与えたに違いないと想うのです。(8月30日記)

季刊 美のたより No.25

昭和48年10月1日

発行 大和文華館